保育内容表現指導法における協同学習の教育的効果と課題

大　塚　習　平

Cooperative learning effects and challenges of Early childhood care and education

Shuhei Otsuka

要旨：

授業「保育内容表現指導法」では、「協働的な学び」の基礎となる力を養う目的で、協同学習[1]に取り組んだ。協同学習「作って演じよう」実践のため、グループ内で必要とされる「役割」を設定し、毎時間異なる「役割」をローテーションする事により体験を積み重ねた。一人一人が全ての「役割」を担うことを通して「異なる立場や考え方を理解し、他者への思いやりを持ってお互いに協働しようとする人間」の育成を目指した。本稿では、協同学習の教育的効果についてアンケート調査を実施し、教育効果について検証し考察を加えた。

キーワード：

保育内容表現　造形表現　演劇表現　協働的な学び　協同学習　ICT 教育

Ⅰ．協同学習について

令和３年の中央教育審議会では「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」[2]が教育目標として掲げられた。学校教育を通じて「育てたい姿」と「生きる力」の理念を具体化するため「対話や議論を通じて自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていく事ができること」[3]としている。

こうした中央教育審議会による「協働的な学び」を実践する為の基礎となる力を養う目的で、授業ではジョンソン D.W が提唱する「協同学習」[4]に取り組むこととした。「協同学習」の考え方は、個人が主体的に学ぶ事を基にして、グループ全体の学びに繋げていくように俯瞰的な視点を得ることとしている。そこでは、受講者間の互恵的な協力関係が必要となる。何故なら個人が与えられた課題や役割を達成し、次にグループの仲間全員が課題や役割を達成した結果として、グループ全体での課題達成に至るからである。こうした過程を経ることによって、課題の達成まで誰も取り残さない「協働的な学び」の意識を生み出すこととなる。また今日「協働的な学び」が注目されている背景には、文部科学省による「新しい学習指導要領の考え方」に記載されているアクティブラーニングがあり、「協働的な学び」によって児童・生徒を中心にした全ての学習者の「主体的・対話的で深い学び」が実現できるとしている。

「協同学習」の教育的効果[5]について、ジョンソン D.W はメンバー全員が共通した課題に取り組む事で、積極的にコミュニケーションをとり合いながら、お互いを高め合うようにな

り、そのことが精神的健康を生み出すとしている。また、こうした協同学習を進めるにあたって、重要な基本的構成要素が５つあるとしている。一つめは肯定的で相互的な依存関係をつくり維持する事である。その為には、お互いの学びに責任があることを確信するような明確な目標を設定する事がポイントとなる。二つめはリーダーや記録係などの役割について個人的責任の認識があること。三つめはグループ内でお互いの得意・不得意が明確になる中での促進的な相互作用があること。四つめはグループの中でコミュニケーションをとりながら役割を担っていくという社会的スキルがあること。五つめは進行状況や方向性を確認しながらグループによる改善手続きがとられることである。

そこで、今回の授業では「協同学習の５つの基本的要素」と「役割分担表」並びに「係と仕事内容」について記したプリントを配布し、本授業における具体例を示しながら、グループワークが「協同学習」となることを確認した。また今回の学習では「協同学習の５つの基本的要素」を学生や授業の実態に合わせて、以下のようにアレンジした。

(1) 積極的な相互的依存関係

構想の初期段階において、個人単位でイメージしているテーマに関して、たとえ同じテーマであっても具体的に形にしていくことにより、各自が異なっていることに気づかされる。受講者は、お互いの異なる意見を尊重し合い、協力して改めてグループで一つのテーマを決定しなければならない。テーマ決定の後も、キャラクター設定や画面構成およびパーツの大きさやデザイン、ストーリー展開について一貫して肯定的で相互的な依存関係が求められる。毎回の授業における「本日の目標設定」と係分担・作業分担がそれを可能とする一助となる。すなわち、受講者は毎回の授業において相互協力を必要とする目標を立て、役割分担を行い互恵的相互協力関係を築いていく。これは五つの要素の中で最も重要とされているものである。

(2) 対面的で協力的な相互交渉

パソコンや iPad、携帯電話などによる SNS が日常的なコミュニケーションツールとなっている昨今であるが、課題「作って演じよう」においては、実際に受講者同士がお互いの顔を突き合わせ、声を出してコミュニケーションし合う能力を高めながら支え合うことが求められる。各グループでは、主に制作チームと脚本・音響チームに分かれて作業する様子が見られたが、その日の制作内容に応じて一つにまとまって打ち合わせたり、一緒に読み合わせをしたりしている様子も垣間見られた。その際、グループ内でも意見が食い違う場面では多少の困難が想定されても、お互いの妥協点を見出す事や、そこから発展的により良いものを考案するなど、交渉術が効果的に磨かれていった。この様にして、グループでは毎回、後述する係の役割分担を意識しながら対面的・協力的なやりとりをする体験を積む事となった。こうした経験は、保育現場においても、同僚や保護者、そして子どもとの関わり合いの中でも活用されることが期待される。

(3) グループ・個人の役割と責任

個人の役割と責任を明確にして全うする一方で、グループ全体として責任を意識させる。それは「皆が一人の為に、一人が皆の為に」という精神を育てることになり、誰か一人の手が空いていたり、逆に誰かが一人でがんばっていたりする状態が不自然であることを、共通に認識

させることに繋がる。例えば、造形が得意な人がリードしながらも、苦手な人も一緒に仕事をしてグループ全体の成功のために力を合わせることによって、良い作品ができる体験を積む機会となる。また数多くの造形作品と演劇の動画が残るため、互いに関与し補い合うことを通して、個人のみの制作では得られなかった成果を感じることができる。個人で取り組む事と集団で取り組むことは、たとえ取り組む内容が同じでも行程が違うので、一人でできたことが皆でできるとは限らない。共同学習を通して、最終的にはグループ構成員一人一人が責任ある個人として成長する事が期待される。

(4) 生きる力となる社会的スキル

グループワークでは、話し合いや制作の過程で相手をよく知り信頼すること、正確なコミュニケーションを心がけること、互いに支え合い、対立が生じても建設的に解決することが必要となる。そして、個人が積極的に周りに関与していく能力や問題解決能力が求められ、その育成は普段の社会生活においても「生きる力」に繋がる。今回の授業を通して、不明な点（道具の使い方や使用方法における助言など）を他のグループから教えてもらいながら解決するなど、グループ間の協同も垣間見られた。また、相互鑑賞や自己評価のアンケート調査においても、気づきを高め合うような内容が多かった。

(5) グループの改善手続き

毎回各グループに1枚ずつワークシートを配布し、授業の始めに「本日の作業目標」「作業内容」を書き出し、授業の最後に「振返り」（反省点、改善点、次回の作業の見通し、質問、相談など）を記述した。ここでは、口頭での話し合いのみに留まらず、敢えてワークシートに書き出すことで、グループの全員が明確に意識できるようにした。「振返り」はグループの目標達成のため、グループ内での貢献について明確にする事で効果的となる。さらに、こうした省察を経て次回の目標に繋げることを促す上でも有効である。提出されたワークシートについては教員が毎回目を通し、それぞれの進行状況や問題点などを把握しながら、肯定的なアドバイスを書き込むことで、グループ全体のモチベーションを高めるようにした。

Ⅱ．授業内容について

今回の授業では、受講者数100名を48名と52名に分け、各クラスとも6〜7名の8グループに分けた。そして、全14回の授業を2つのステージに分け、前半ステージを課題1「パネルシアターの制作と発表」に、後半ステージを課題2「ペープサートの制作と発表」に設定した。授業初回は課題説明とグループ結成ならびに役割決めの時間とし、振返りとまとめの時間を第7回と第14回に設定した。そして、第2回から第5回まではパネルシアター制作に取り組み、第8回から第12回まではペープサート制作に取り組む事とした。第6回は「パネルシアター発表会」第13回は「ペープサート発表会」の時間とし、相互鑑賞の機会とした。発表の様子は動画データとして授業支援システムWebclassに保存し、いつでも見直す事ができるようにした。尚、発表練習および打合せの際は、密を避けながら効率的に取り組む事ができるよう、グループで1台iPadを持参して共有スペースやアリーナを活用した[6)]。

全14回の授業の前半部分にパネルシアターを設定した理由は二つある。一つは、作業内容がパネルペーパーへのアウトラインの描きこみ

から始まり、次にパネルペーパーへの着色、そしてパネルペーパーの切り離し（場合によってはパネルペーパーを重ねて接着する）というように、素材と制作方法が限定されているからである。パネルペーパーへの描き込みを除いては比較的単純な作業なので、作業分担によって時間短縮する事が可能となる。短縮できた時間は、キャラクター設定や台本作成または練習に充て、作品完成度を高めることができる。もう一つの理由は、グループ全員が比較的シンプルな制作に取り組み、完成まで一気に持って行くことで、達成感や自信を持つことができるからである。こうして高まったモチベーションを維持した状態で、次の課題であるペープサートに、グループメンバー全員がスムーズに取り組む事ができることを期待した。

各グループが「パネルシアター」と「ペープサート」に取り組んだ際の内容と手順については、グループにより多少の差は見られたが、概ね（表1）の通りとなった。

また、課題に取り組むにあたり、受講者には下記の具体的な役割分担、つまり六つの係（リーダー、記録・連絡・調整係、材料・用具係、脚本・演出係、デザイン・アウトライン・着彩係、効果音・BGM・歌係）と仕事内容を提案した。一人一役で毎回ローテーションしながら、全ての係を経験することによって、他のメンバーの仕事ぶりも客観視できるようにし、また様々な役割の理解や、不足している力への認識を深められるようにした。ただし各係をじっくり体験したい場合は、グループ内で協議の上で適宜交代しても良いこととした。

○グループリーダー

グループのまとめ役。全体を見てグループ内で出た意見をよく聞いた上で、言葉がけをしながら仕事を促す。具体的には、授業の始まりに「役割分担表」を用いながら、その日の役割分担について発表する。事前打ち合わせと振返り会の司会、タイムキーパーに加え、後片付けを促す立場にある。通常、リーダー的存在は固定化されがちだが、一人一人が持ち回りで担当することで近い将来、保育者として必要となるリーダー性を養うことを期待した。

○記録・連絡・調整係

グループの話し合いを基に、予め配布されたワークシートに内容を記入する。振返り会の際に時間がない場合などは、各係に聞き取りをして記入した用紙を「提出用封筒」に入れ提出することとした。

○材料・用具係

材料・用具係は、これまでの授業（1年次の

表1 「課題に取り組んだ際の内容と手順について」

①テーマ決め・・・・・・・・・・子ども達に伝えたいことや育てたい心は何か検討する。
②ストーリー設定・・・・・・・・テーマを具現化するための題材をどうするか検討する。
③キャラクター設定・・・・・・・ストーリーを展開するためのキャラクターを決める。
④脚本作成とキャラクター制作・・見やすい脚本とキャラクターを工夫する。
⑤台本の読み合わせ・・・・・・・声に出して読むことで、セリフについて推敲する。
⑥演出や効果の確認・・・・・・・動画撮影により、発表内容に関しグループ内評価する。
⑦発表・・・・・・・・・・・・・相互鑑賞により、発表内容に関しクラス内評価する。
⑧振返り・・・・・・・・・・・・振返り会を行い、改善点及び改善案を明確にする。

必修科目や２年次の選択科目など）で学習してきた技法をテーマと関連付けて、適切な材料や画材や用具を提案する。

○脚本・演出係

グループで決めたテーマに沿った脚本を作成する。子ども達に伝えたい内容に適していれば、原案となる物語があっても良い。または全くのオリジナルで作成しても良い。

○デザイン・アウトライン・着彩係

パネルペーパーに描くキャラクターを設定し、油性マジックで輪郭線を描く。輪郭線の乾燥状態を確認してから、水彩絵の具またはアクリル絵具で着彩していく。ここでは、数多くのキャラクターを場面ごとに書き分ける必要があるため、定められた時間内では一人で捌き切れない。よって、作業スケジュール確認した上で分担し、作業内容によって適宜グループのメンバーに割当てることで、効率よく進めていく。

○効果音・BGM・歌係

効果音・BGM・歌係は、鑑賞者を物語の世界に引き込むために、動作に見合った効果音を入れたり、主人公の気持ちや場の雰囲気にふさわしいBGMを探して流したりする。または鑑賞者と共に物語を創り上げる気分を味わえるように、一緒に歌う歌を創作したり探したりする。

Ⅲ．協同学習の効果について

協同学習のねらいを説明した上で、役割分担を明確にし、それをローテーションすることで、一度経験した係について次に担当となった人に教えたり、アドバイスしたりするようになった。このようなやりとりをきっかけに、各自が以前よりも主体的に取り組もうという意識が強まり、様々な問題点についても忌憚なく言い合えるよう雰囲気が形成されていった。具体的には、デザイン原画からペーパーを使ってトレースする際、なぜ柔らかい鉛筆（B、2B、4B）を使用するのか、その意味がお互いの話し合いやアドバイスによって理解されるようになっていた。また、パネルペーパーを重ねて接着する際には、ペーパーの端に接着剤（プッシュボンド）をドット状につけて貼り合わせるようにして軽量化を図ることや、広い面積を貼る場合は授業時間の終了間際に貼り合わせて乾燥させておくことの意味についても、お互いの教え合いによって理解できるようになった。さらに、着色に関しても最初から厚塗りしてしまうのではなく、薄く塗って色合いを確かめながら、少しずつ塗り重ねることによって発色も良くなり、ひび割れもしないパネルペーパーができることを学び合っていた。そして、授業回数を重ねるごとに、役割についても主体的に考えるようになり、グループの状況に合わせながら、一人一人が段取りを考えながら効率よく進められるようになっていった。またグループ内で何か問題が発生した場合でも、すぐにTAや教員に意見を求めたり質問したりするのではなく、他のグループではどうしているのかiPadを見て確認したり、メンバーに聞いたりして、お互いに学び合う事ができる様になっていった。具体的には、左右逆側を向いた猫のイラストが描かれたパネルペーパーを貼り合わせると裏側の絵が透けてしまうが、その際、パネルペーパー間にお華紙を挟む事によってこうした透けを防ぐことができることや、絵具だけではなく色鉛筆など他の画材を使うなどの工夫も、グループ間で共有されていた。

授業の冒頭では必ず本日の目標について話し合い、授業の終わりには振返り会を通してワー

クシートに記録するようにした。毎時間の目標および振返りを記録しておくことにより、次時の作業に入りやすくなり、段取りも良くなっていく様子を確認できた。また協同する上で大切なことに学生自身が気づくためには、ある程度の時間をかけて学習に慣れることも必要だったので、全14回というロングスパンで実施できたことは良かった。

Ⅳ．アンケート結果

今回の協働学習におけるねらいがどれほど達成されているか、オンラインフォーム作成ツール（Google Forms）によるアンケート調査を

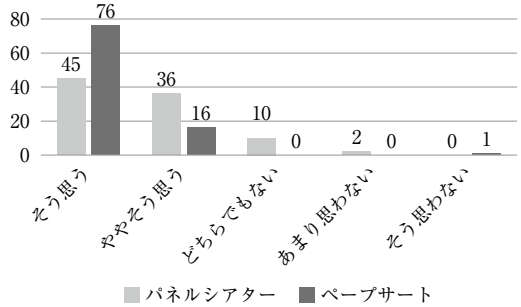

図１「グループワークを通して、リーダーなど様々な役割を体験できた」

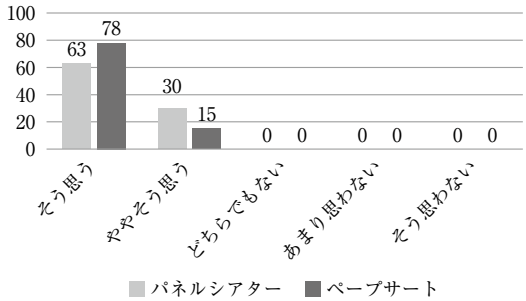

図２「制作方法や注意点について学ぶ事ができた」

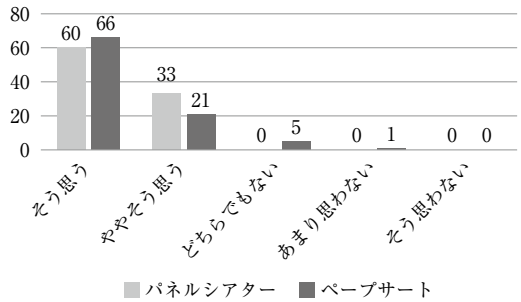

図３「ストーリーについて工夫する事ができた」

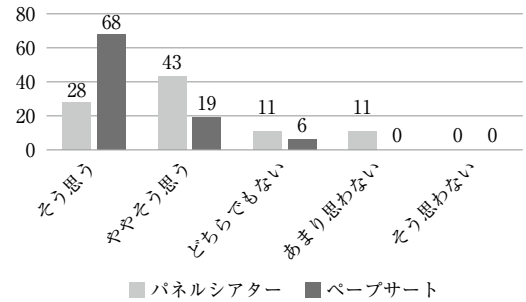

図４「声の大きさや高低について工夫する事ができた」

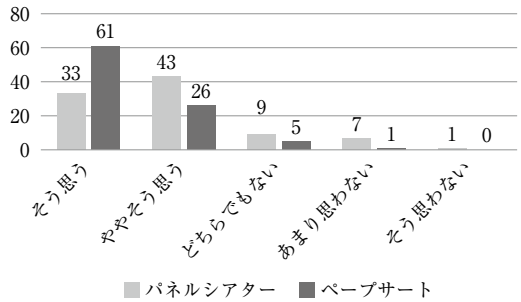

図５「間の取り方や話す速さについて工夫することができた」

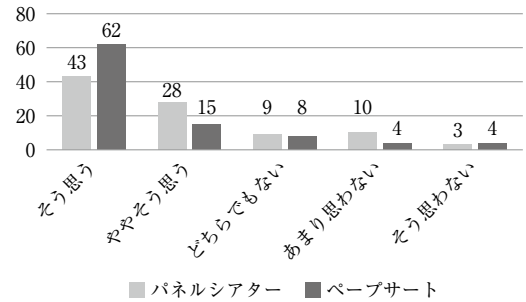

図６「音楽的な表現について工夫する事ができた」

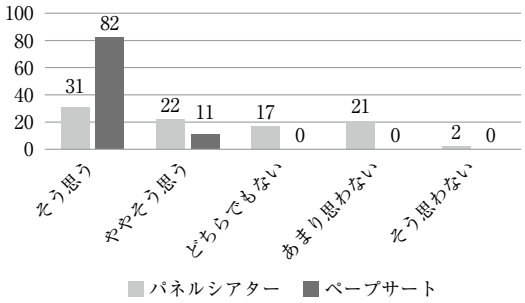

図７ 「身体的な表現について工夫する事ができた」

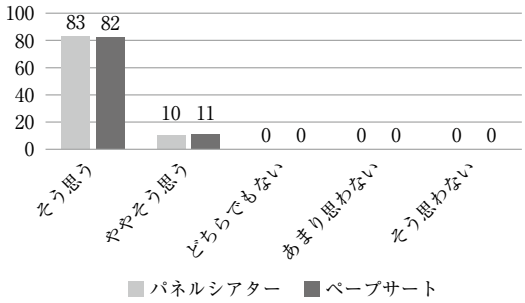

図８ 「グループで協力し合って進める事ができた」

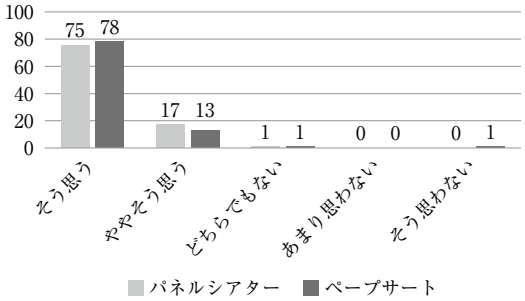

図９ 「お互いに意見を出し合うことができた」

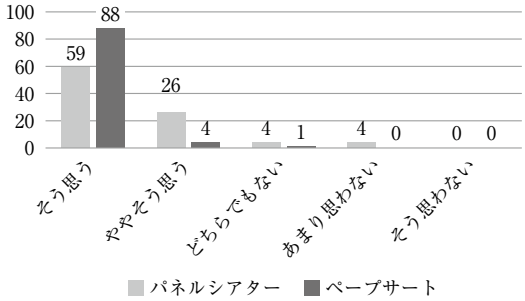

図10 「自分自身が楽しんで演じる事ができた」

実施したところ、以下のような結果となった。

また、アンケート調査における「自由記述」欄についてまとめたところ「取り組む姿勢」「演じ方」「作品制作」「動画作成と活用」という４つの観点に集約することができた。

(1) 取り組む姿勢について（63）

・役割を分担することで効率よく作業する事ができた（19）
・一人では思いつかなかいような発想をかたちにできた（10）
・チームワークが良くなり、不得意を補い合い助け合いながら進めることができた（10）
・相互鑑賞により、子ども目線で考えたりアイデアの学び合いになったりした（8）
・一人一人が積極的に意見を出し合いながら主体的に動けるようになった（8）
・計画的に進めることができた（1）
・進行具合を見ながら指示を出すことができた（1）
・自分でも知らなかった能力（文章力）を発見できた（1）
・協調性や達成感を実感することができた（1）
・他のグループの完成度に圧倒されたが、自分達も特色を出すことができた（1）
・共同制作の楽しさを味わうことができた（1）
・パネルシアターでできなかった部分をペープサートで補う事ができた（1）
・構想、制作、発表までのプロセスを楽しむことができた（1）

(2) 演じ方について（70）

・子どもに伝わりやすいように、声音、高低、大小、緩急を工夫できるようになった（20）
・音源（効果音・BGM）探して取り入れることにより、世界観を表現できた（10）

・役になりきって演じ分けたり、感情をこめて演じることができた（10）
・歌を取り入れることで、演じる側も見る側も一緒に楽しむことができた（10）
・参加型になるよう、手遊びや子ども達への言葉掛けを工夫できた（5）
・ペープサートの動かし方を、誰が話しているか分かりやすいように工夫できた（5）
・ナレーションによって、ストーリーがより分かりやすいようにできた（2）
・間の取り方について工夫する事ができた（2）
・ピアノ演奏によって、子ども達のペースに合わせながら演じる事ができた（2）
・子ども目線で鑑賞しやすくなるよう立ち位置などを工夫できた（1）
・場面の切り替えを分かりやすく工夫する事ができた（1）
・立ち位置によってセリフや順序を変え、効率良く進める事ができた（1）
・対象を幼稚園生から小学校低学年まで広げることができた（1）

(3) 作品制作について（13）

・背景や舞台の工夫により、世界観をより明確にする事ができた（7）
・ペープサートの完成度を上げることができた（2）
・小道具の大きさなど完成度が上がることができた（2）
・身近にあるものを工夫して使って表現できた（1）
・立体的な表現を工夫する事ができた（1）

(4) 動画作成と活用について（3）

・見えやすく分かりやすいような位置や場所を工夫して撮影する事ができた（1）
・動画を客観的に見直しながら、セリフを変更するなどして工夫する事ができた（1）
・動画を観ることで、まずは発表者側が楽しむことの大切さを改めて実感できた（1）

Ⅴ．まとめ

今回の協同学習では、グループの一人一人が全ての「役割」を担うことを通して「様々な立場や考え方を理解し、他者への思いやりを持ってお互いに協働しようとする人間」の育成を目指すねらいがあった。こうしたねらいが達成されているかGoogle Formsのアンケート調査を実施したところ、下記の通り概ね達成できたことが分かった。

問1「グループワークを通して、リーダーなど様々な役割について体験することができたか」（図1）では、課題1パネルシアターで「そう思う」「ややそう思う」とした学生が87％であったのに対し、課題2ペープサートでは「そう思う」「ややそう思う」とした学生は99％であった。そして問8「グループで協力して進めることができたか」（図8）ではパネルシアターとペープサートともに「そう思う」「ややそう思う」とした学生は100％であった。さらに問9「お互いに意見を出し合うことができたか」（図9）では、パネルシアター「そう思う」81％「ややそう思う」18％であったのに対し、ペープサートでは「そう思う」84％「ややそう思う」14％となっており、比較して達成率が上がっていることがわかる。

アンケート調査（図2）～（図10）までのグラフから、1回目の課題「パネルシアター」を経験した後の2回目の課題「ペープサート」では、全ての設問において、取り組んだ内容が向上もしくは維持できたことが読み取れる。特に

問10「自分自身が楽しんで演じることができたか」（図10）では「パネルシアター」において「そう思う」64％だったのが、「ペープサート」では「そう思う」95％と高い評価になっている。

Ⅵ．考察

今回の授業内容「作って演じよう」では、受講者一人一人が様々な「役割」を担うことにより、お互い異なる立場に立ちながら課題に取り組むことができたことが、問１の回答結果より明らかとなった。こうした機会を得たことにより、一人一人が自分自身の視野を広げながらグループ全体に協力しようとする姿勢を持ち、達成感や自己肯定感を感じることができたことが、問８の回答結果より読み取ることができる。また自由記述で「役割を分担することで効率良く作業する」ことを実感できただけでなく、「一人では思いつかないような発想をかたちにできた」と「協働的な学びの実現」に至る受講生も多く散見された。中にはグループのために脚本を請け負う中で「自分でも知らなかった文章能力に気づくことができた」という受講生もいたことは予想外の学習効果であった。さらに問９の回答結果から、グループ内で積極的な話し合いがなされたことが分かったが、これは一人一人が様々な「役割」を担うことで異なる立場からものを考える機会を得たことにより、「自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり」することに繋がったと考えられる。よって本授業のねらいである「様々な立場や考え方を理解し、他者への思いやりを持ってお互いに協働しようとする人間の育成」は、概ね達成できたといえる。

また問10における回答結果から、１回目の「パネルシアター」では無我夢中で取り組んだ演技において、２回目の「ペープサート」では表現することに余裕が生まれ、真摯に取り組むことによって「自分自身が楽しんで演じる」レベルまで達したことが伺われる。また自由記述欄では、「演じる」ということについて「子どもに伝わりやすいように工夫する」ことが最も肝心なことで、そのために「大きな声を出したり抑揚をつけたりしながら表現すること」が必要となることが分かったとしている。そして「演技することの楽しさや難しさを感じること」ができたというコメントが散見された。このような体験を通して、子ども達の目線に立って指導したり助言したりすることがどういうことなのか、より具体的にイメージできるようになったと考えられる。さらに受講者からは、制作したもので演じることを通して「自分が躓いてしまったところを参考に、子ども達に教える際の道標としたい」「指導者として必要とされる心構えや指導内容について身をもって学ぶことができた」などの声を聞くことができた。こうしたことから「主体的・対話的で深い学び」が実践できたと考えられる。

さらに今回の授業を通して、ICT機器を活用した授業スタイルも試行することができた。受講者はグループごとに１台のiPadを携帯して、教室からアリーナ（図11）や共有スペース（図12）に移動して打ち合わせや発表練習を行ったが、学内のどこにいてもZOOMに接続できる環境だった為、繋がりを保ちながら取り組む事ができたようである。また自由記述に「動画を客観的に見直しながら、セリフを変更するなどして工夫することができた」とあるように、ZOOMを通して自己のグループの演劇を客観的に観ることができたようである。加え

図 11 「アリーナでの発表練習の様子」

図 12 「共有スペースでの発表練習の様子」

て他のグループがどのように取り組んでいるのかについても観ることできたことから、ICT 機器の活用はグループのモチベーションと演劇の向上に強く影響したと考えられる。

加えて演劇表現の新たな要素として、動画撮影および動画編集の技術の向上を挙げることができる。今回の授業では演じている様子を iPad や携帯電話で撮影しているグループが多く散見された。自由記述に「見えやすく分かりやすいような位置や場所を工夫して撮影することができた」とあるように、動画撮影ではフレームに入れるべき主要なものは何か、どの範囲までフレーム内に捉えるかという構図について考えたり、ペープサートでの登場人物を目立たせるにはどのようにしたら良いかというカメラアングルを工夫したり、主人公の心情を表現する為の光量を調整したり、心理状態を効果的に表現する背景を作成したりして、グループ内で何度も検討を重ねる姿が見られた（図 13）。また動画編集に関して、編集ソフトやイコライザーなどを活用した動画の作成は、予想を超える完成度の高さであった。

図 13 「iPad を活用した動画撮影」

Ⅶ. おわりに

今回の授業計画においては、グループ内で発表までのペース配分が難しかったという反省があったので、次年度の授業においては、一回目の発表までのスケジュールを立て、三回目の授業で修正案を立てることを試行したい。

また授業の「振返り会」の時間が少なかったため、グループによっては制作や練習を進める中で、記録係が振返りレポートに着手していたり、通り一遍な記録をしていたりしていた。よって振返る時間をどう捻出するかが今後の課題となった。

註

1)「協働」(collaboration) と「協同」(cooperation) の違いについて、三省堂国語辞典編集委員の飯間浩明は、協働は「同じ目的のために力を合わせて働くこと」とされており、協同は「心を一つにして助け合って仕事をすること」とされているので、「力を合わせる」という点で共通していると述べている。また「小・中学校の学習指導要領に対するＱ＆Ａ」では、「異なる個性を持つ者同士で、問題の解決に向かうこと」の意義を強調するため、「協同」を「協働」と改めたと説明している。

2) 令和３年の中央教育審議会では次期教育振興基本計画諮問概要「令和の日本型学校教育」答申において「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」を重点目標として示している。

3) 平成28年12月21日に示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、第３章「「生きる力」の理念の具体化と教育課程の課題」の中で学校教育を通じて育てたい姿と「生きる力」の理念の具体化を以下の３つのあり方としている。

①社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた店頭や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。

②対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること。

③変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を想像していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること。

4) ジョンソン D.W は「協同学習」の教育的効果について「メンバー全員が目標達成に向けて努力するようになり、共通した課題に取り組む事によって自分の学びとお互いの学びを最大限に高めようとして、積極的な対人関係が生まれる。誰か一人の努力がグループ全体にも良い影響を与えたり、一人の成功の陰には個人とその仲間の両方が貢献していたりすることで、相互依存的な関係が生まれ、仲間同士励まし合う事によって精神的健康が維持される」と述べている。

ジョンソン, D.W ジョンソン, R.T ホルベック, E.J 訳：石田裕久、梅原巳代子『学習の輪―学び合いの共同教育入門―』(2010) 二瓶社　p.13

5) 練習の際は、密を避けることと声などがお互いに干渉し合わないよう、教室以外にも、アリーナや共有スペースを利用して取り組むようにした。各グループで iPad を１台携帯し、お互い練習の様子が把握できるようにした。こうした練習ではパネル板が複数枚必要となったので、平成30年の授業において学生が制作したものを活用した。

参考文献

・「協働する保育実習～保育現場と保育者養成校～【養成校編】」(2020) 増田まゆみ企画・監修・解説 岩波映像株式会社

・「協働と参加：コミュニティづくりのしくみと実践」(2021) 金川幸司編著　晃洋書房

・「教職協働による大学改革の軌跡」(2021) 村上雅人 株式会社東信堂

・「やってるつもりのチーム学校」(2017) 片山紀子編著　森口光宏輔著　学事出版株式会社

・「参加と協働のデザイン：NPO・行政・企業の役割を再考する」(2009) 瀬古一穂編著　学芸出版社

・「協働で地域づくりを『変える』『つなぐ』『活かす』」(2006) 特定非営利活動法人まちづくり政策フォーラム編著　株式会社ぎょうせい